

縮で確認した。セボフルレン麻酔下でラットの鎖骨下動脈を切断して全脱血した後、大脳、脳幹（中脳、橋、延髄）、脊髄腰膨大部を速やかに摘出した。モノアミン類は液体クロマトグラフィーにて測定した。結紮側脊髄のNA, ドパミン, 5-HT が非結紮側, 対照群, シヤム手術群と比較して有意に減少した。これらより、慢性痛の成立と持続には NA 系, 5-HT 系下降性抑制系の機能低下, すなわち脳幹部の関与が示唆された。

26) 坐骨神経結紮による慢性疼痛モデルラットにおける脊髄, 脳幹, 大脳のアミノ酸組織濃度の変化

相田 純久・唐沢 正弥(帝京大学)  
手塚 新吉・岡田 和夫(麻酔科学講座)

抑制性アミノ酸 GABA は侵害刺激の伝導の抑制に関与し、グルタミン酸などの興奮性アミノ酸は中枢性感作や wind up と関係している。そこで、慢性疼痛時における中枢神経系内の抑制性、興奮性アミノ酸の組織濃度を測定し、慢性疼痛との関係を検討した。大腿部坐骨神経を結紮した慢性疼痛モデルラットを作成した。結紮後14日に、疼痛閾値の低下をホットプレート(55℃)上からの逃避行動開始時間の短縮で確認し、セボフルレン麻酔下でラットの鎖骨下動脈を切断して全脱血した後、大脳、脳幹（中脳、橋、延髄）、脊髄腰膨大部を速やかに摘出した。アミノ酸類は液体クロマトグラフィーにて測定した。GABA, グリシン, タウリンは結紮群の両側脳幹部で減少傾向を示したが、グルタミン酸, アスパラギン酸の濃度には有意な変化はなかった。これらより、慢性疼痛による影響は、脳幹部にも及ぶことが示唆された。

特 別 講 演

「術後痛」

東京大学大学院医学系研究科外科学専攻  
生体管理医学講座麻酔学教授  
花 岡 一 雄 先生

第59回新潟癌治療研究会

日 時 平成11年7月17日(土)  
午後2時00分より  
会 場 新潟東映ホテル1F  
白鳥の間

I. 一 般 演 題

1) 上咽頭癌放射線治療後に生じた下顎枝部骨肉腫の一例

南部 弘喜・田中 彰  
小根山隆浩・伊藤 英史(日本歯科大学新潟)  
戸谷 収二・岡田 康男(歯学部口腔外科学)  
岡野 篤夫・又賀 泉(教室第二講座)  
田中 久夫(長岡中央総合病院耳鼻咽喉科)

上咽頭癌放射線治療8年後に左側下顎枝部に生じた骨肉腫の一例を報告した。

症例は62歳、女性。1989年移行上皮癌にて、linac 外照射60Gy施行。1997年9月頃より開口障害を認め、さらに左側下唇からオトガイ部にかけて知覚麻痺を認め当科来院。顔面は左側頬部に骨様硬のびまん性腫脹を認め、開口度は左側上下中切歯間で18mm、口腔内は、左側下顎第1、第2大臼歯頰側歯肉部より外斜線に沿って骨様硬の腫脹を認めた。1997年12月2日当科入院し、画像診断で非上皮系悪性腫瘍が疑われたため、局所麻酔下にて口腔内よりopen biopsyを施行、病理組織学的診断はosteosarcomaであった。治療法は外科的療法を選択し、術後MTX-LV 救援療法を2クール施行した。現在外来経過観察中で、腫瘍の再発、転移は認めていない。第2癌は第1癌の照射野にはほぼ一致し、放射線誘発腫瘍が強く示唆された。

2) 頸部後発リンパ節転移を認めた頭頸部癌16例の臨床的検討

長島 克弘・高木 律男  
星名 秀行・藤田 一  
宮浦 靖司・宮本 猛(新潟大学歯学部口)  
相馬 陽・鶴巻 浩(腔外科学第二講座)

当科開設以来25年間に治療を行った頭頸部癌一次症例281例のうち、初診時N0で、原発巣の再発を認めないにもかかわらず、頸部に後発リンパ節転移を生じた16例を対象とした。